The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | 心理的支えに関する臨床心理学的研究 |
| Author(s) | 串崎, 真志 |
| Citation | 大阪大学, 1999, 博士論文 |
| Version Type | |
| URL | https://hdl.handle.net/11094/41299 |
| rights | |
| Note | 著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、<a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">大阪大学の博士論文について</a>をご参照ください。 |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【13】

| | |
|---|---|
| 氏　　名 | 串崎真志（くしざきまさし） |
| 博士の専攻分野の名称 | 博　士（人間科学） |
| 学位記番号 | 第　14337　号 |
| 学位授与年月日 | 平成11年3月25日 |
| 学位授与の要件 | 学位規則第4条第1項該当<br>人間科学研究科教育学専攻 |
| 学位論文名 | **心理的支えに関する臨床心理学的研究** |
| 論文審査委員 | （主査）<br>教　授　倉光　修<br>（副査）<br>教　授　三木　善彦　　助教授　老松　克博 |

## 論文内容の要旨

本論文の目的は，「『私』という存在を支えるもの」を心理的支えとして概念化し，それを測定する尺度を開発し，また，心理療法のプロセスにおける意義について考察することにある。

本論文は3部構成で10章からなっている。

まず，「第一部　心理的支えの概説」（第1章～第4章）では，心理的支えに関する諸概念を整理し，「私」を支えるものとして，対人的支え，内面的支え，宗教性による支えの三つを仮定した。対人的支えとは他者との関係における支えであり，内面的支えとは，思考様式，信念，人生観などによる支えである。これらは，われわれが現実的次元を生きていくうえで重要なものである。また，宗教性による支えとは，自他を超えるものとのつながりを感じることによる支えである。これらは，われわれが死を前提とした生を，あるいは自らの「異界」をどう生きるかを考えていくうえで重要であり，われわれの人生に深みを与えるものといえる。言い換えれば，心理的支えとは，「私」という存在を，対人的，内面的，宗教性のそれぞれの次元においてどのように位置づけていくか，ということであり，第三部で述べるように，心理療法は，このような意味での「私を支えるもの」を見いだしていくプロセスであると考えることができる。

「第二部　心理的支えに関する基礎的研究」（第5章～第8章）では，第一部で述べた心理的支えの概念を操作的に定義して，それを測定する心理的支え尺度を作成し，その信頼性と妥当性について検討した。

まず第5章では，大学生を対象として質問紙調査を実施した。その結果，「友人・他者による支え」「異性による支え」「父母による支え」「建設的思考による支え」「現在の立場・学業による支え」「宗教性による支え」の6因子46項目を抽出した。前者三つは，ソーシャルサポート尺度や孤独感と，後者三つは，充実感・自我同一性・自己実現傾向などの尺度と有意な相関がみられ，前者は対人的支え，後者は内面的支えを測定しているものと考えることができた。

第6章では，第5章で開発した尺度をふまえて，4因子19項目（「内面的支え」「父母による支え」「異性による支え」「宗教性による支え」）からなる短縮版を作成した。ここで内面的支えは，個人志向性・社会志向性の両尺度と正の相関が見いだされた。これは，内面的支えが，単に自分を支えるというだけではなく，内的・外的規範を重視する姿勢につながることを示している。内面的支えは，われわれが現実的次元を生きていくために重要な支えであるといえるだろう。

第7章では，さらに尺度の改訂を重ね，5因子15項目（「友人による支え」「宗教性による支え」「現在の立場によ

る支え」「建設的思考による支え」）からなる短縮版Ⅱを作成した。これによって，心理的支えの測定がより簡便になった。また，青年期における恋愛体験との関連を検討したところ，失恋時の感情体験が大きいほど，宗教性による支えを感じていることが明らかになった。異性との関係は，深層心理学的には自らの「内なる異性」にふれる体験でもある。同時にそれは，宗教性の次元を体験する契機ともなり得ることが示唆された。

第8章では，内観療法の体験前後，およびフォローアップ時（1年2～4か月後）にかけての心理的支え尺度得点の変化を測定した。その結果，(1)内観後は心理的支えの感覚が高まり，フォローアップ時においても，概ねそれは持続していること，(2)内観後は，「過去の経験による支え」や，「現在の地位・立場による支え」の得点が低くなる場合があり，内観の特徴である「健康な罪意識」が存在すること，などが確認された。また，(3)自由記述の内容には，宗教性に関する記述が少なからずあり，その重要性が指摘された。

「第三部　心理的支えと心理療法」（第9章・第10章）では，心理療法の事例を通して，心理療法のプロセスにおける心理的支えの意義について考察し，次のような「意識の幅」仮説を提唱した。まず，(1)われわれが生きている心理的な空間には，対人的な次元から宗教性の次元まで（これを日常性の次元から「異界」の次元までといってもよいだろう），さまざまな層があると考えた。そして，(2)人はそれぞれ，その人特有の心理的な空間，すなわち心の層を生きていると仮定した。すなわち，ある人は日常的な次元を多く生き，ある人は「異界」を多く生きているという具合にである。これをその人の「意識の幅」と呼んでおく。(3)心理療法においては，セラピストとクライエントはイメージでつながっており，このような「間接的な」関係に支えられて，クライエントの「意識の幅」は広がっていく。それにともなって，クライエントはこれまで生きられなかった心の層を生きるようになる。すなわち，ここで心理療法の目的とは，「意識の幅」が広がり，さまざまな心の層をある程度意識的に生きることができるようになることにあると考えられる。その際，(4)自らをより深いところから支えるものとして，しばしば，宗教性（「異界」）の次元にふれる体験が重要であることも指摘された。

このように，心理的支えとは，「私」という存在をどう位置づけていくかということに関わるものであり，心理療法の目的はまさにこの点にあると筆者は考えている。ここで，セラピストの役割は，まず第一に，(1)クライエントの生きている心の層まで降りていくことであり，そして，(2)クライエントの孤独なイメージの旅を共に歩み続けることである。その過程においては，(1)孤独や混沌に耐える力と，(2)偶然にひらかれ自然の流れに委ねる柔軟な心が必要となるだろう。そのためには，セラピスト自身が，自らの「意識の幅」を広げ，さまざまな心の層を生きられるように，日頃から訓練を積んでいくことが大切である。

## 論文審査の結果の要旨

本論文では，心理的支えについて，対人的支え（interpersonal support），内面的支え（intrapersonal support），宗教性による支え（transpersonal support）の3側面が捉えられる「心理的支え尺度」が作成され，その信頼性，妥当性が検証された。さらに，心理療法の過程や恋愛体験によって，「心理的に支えられている感じ」がどのように変化するかが質問紙調査や事例研究によって検討された。

調査1では，自由記述による予備調査に基づいて，上記3側面を測定する「心理的支え尺度」が作成された。本尺度は高い信頼性を示し，関連する心性を調べている8つの尺度との相関から妥当性も有していることが確かめられた。

調査2では，「心理的支え尺度」短縮版が作成され，他の尺度との関連が調べられた。その結果，心理的支えは孤独感の共感性尺度と，友人父母による支えはソーシャルサポート志向性尺度と，内面的支えは個人志向性・社会志向性尺度と高い相関を示すことが分かった。

調査3では，恋愛体験と心理的支えの関連が調べられた。その結果，青年女性の失恋時の感情体験の強さが，宗教性による支えを感じる程度と中程度の相関を持つことなどが示された。

調査4では，内観療法の前後で心理的支えが変化しているかどうかが調べられた。その結果，多くの対象者において，内観前よりも内観後のほうが心理的に支えられている感じが強くなっていることが見いだされた。ケースによっては，この変化が1年4カ月後に行われたフォローアップ調査でも維持されていた。

また，本論文には串崎自身がおこなった2年4カ月にわたる心理療法の過程で，心理的支えに変容が見られたケースが報告されている。すなわち，クライエントの少年は，当初非常に生気がなく，話もほとんどしなかったが，半年後に次第に趣味的な世界を開示するようになり，2年後には，母親の信仰が自分に引き起こした葛藤について語るようになった。その後，危機的な時期を経て，クライエントはその宗教に加入することを決意し，しっかりと自己主張できるようになっていった。この過程では，セラピストによる対人的支えが，内面的支えや宗教的支えの深化につながったことがうかがわれる。

本研究は，以上のように，心理的支えについてさまざまな角度から真摯な検討をおこない，臨床心理学的に有用な尺度や知見を提供したのみならず，心理臨床の実践にも有益な視座を与えたものとして高く評価できる。よって，審査委員会では，本論文が博士（人間科学）の学位に十分値すると判定した。